
古木の下で

ひろ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

古木の下で

【Zコード】

Z0134L

【作者名】

ひる

【あらすじ】

大学一のもて男、羽瑠はるを好きになってしまった、友人すら作れない孤独な四季しきは、ある日羽瑠のシンパに絡まれ、その後羽瑠から告白を受けてしまつ。

その1（前書き）

恋愛ものですが、B.L.、いわゆるボーイズラブですので、『理解いただけない方は』『遠慮ください』。

僕、姫野四季が地元を離れて2年がたつていた。

いつもの様に大学までの道を急いで歩く。

朝の喧騒に押し出されながら、ただ前を向いて歩き何時もの繰り返しに溜息が出た。

そうして校門に近い場所に堂々とその姿を孤立させ、まるで人々に己を認識させるかのように立っている銀杏の古木の前に差し掛かつた時、やっぱり何時もの声がした。

「おはよー、四季

声を掛けられ振り向くと、同級の各務羽瑠が自転車に跨り行き交う人の視線を独り占めしていた。

「・・・おはよ

僕の億劫そうな声に気付きもせず、そのまま自転車をおり横を歩く。

「今日も良い天気で良かった

にこにこと笑いながら横を歩く羽瑠に

「そうだね

と短く答え歩みを速めた。

同じ性別とは思えないほどに整った顔立ちの、カリスマ性を持つた羽瑠は学生の憧れの的だった。

そんな彼を初めて目にしたのは大学の入学式の日、沢山の人に行き交う中すっと僕の瞳の中に入った彼はあまりにも目立ち、眩しくさえあつた。

目で追う事で自分の気持ちに確信めいた物を覚え苦笑を零す。

よもや自分が同姓の、まして大学一の男を好きになるなんて思つてもいなかつた。

友人も沢山いて、いつもゼミの中心的存在の羽瑠が、いつも1人で、浮いてしまう僕と接点を持つたのは偶然だったはずだ。

その偶然が早くも2年を迎える。たまたま取ったゼミに彼を見つけ

た時、思わず喜んでいた。そしてそんな自分の気持ちに名前を付けられずにいた。

大学に入り初めてのゼミ。

僕は少なからず緊張し広い講堂に入った。

ぐるりと周りを見渡すと、入学から2ヶ月の間に友人関係を築いた同級生が、そこそこでスラムを組み嬉々たる声を上げている。

しかし、僕の周りにはぽつかりと穴が開いた様に空席がめだつた。昔から、そうだ。

中学の時も、高校の時も、大概1人、というのが多い。決して、1人が良かつた訳ではなく頑張つて友人関係を築こうとした時期もあった。

しかし、何故か上手くいかず、今に至る。

溜息を吐きながら教材を開いていると、ふと影が僕を覆つた。不思議に思い頭を上げた時、声が降つてくる。

「ここ、開いてる？」

良く通るバリトンの声がし、横の席に誰かが腰を降ろした。驚いてその人物の顔を見、息が止まる。

それが羽瑠だつた。

僕の視線に気が付いた彼が振り返る。

「誰か来る予定だつた？」

徐にそう聞かれ、反射的に首を振つていた。

「そう、良かつた。あ、俺、各務 羽瑠。あんたは？」

整つた顔を笑顔で崩し、そう言つた羽瑠から僕は視線を外せないでいた。

あれから約2年。

羽瑠は何かにつけ、僕の前に現れていた。

それは、とっても些細な事から、大きなことまであって僕の戸惑いは大きい。

近くのアパートに住んでいるらしい彼は、毎朝僕の姿を見つけると、挨拶をし中までの数分を一緒に歩いた。

今日も勿論そうで、足早に歩く僕の隣をゆっくりと歩いていた。そうして、いつのも様に彼のシンパが僕達の周りを囲む。

「今日もお2人で登校か？」

とからかう声は、必然的に僕に向けられ、いたたまれなくなる。何時もはそれだけで済んでいたのに今日は違っていた。

シンパの輪の中から鋭い声が上がる。

「あんた、何なんだよ！」

そこに居た全員が声の主を探す。

シンパの中央ほどにその人は居た。小柄な彼は確か須藤^{すどう}、とかいつたか。

鋭い眼差しが僕を射抜く。

「どうしたの、秋葵ちゃん怖い顔して」

シンパの1人の声に彼が更に怒るのがわかつた。

秋葵と呼ばれた彼は一步前に出ると、僕を見据え

「羽瑠さんに近づかないでよ！あんたが居ると迷惑なんだよ！…」
明らかな敵意。戸惑いがその場を包んだ。

「…え、と、須藤くん…だつたかな？」

「そうです」

彼は僕の声掛けに瞬時に答える。

「言っている意味が解らないんだけど？」

小柄な彼のかわいい顔が歪んだ。

「はあ？！あんた馬鹿じゃないの？！今この学校の中に広まってる噂しらないの？！」

「うわさ？？何の？？？」

クエスチョンマークが頭の中を踊る。噂、とは何なのか、僕には皆目見当も付かなかった。

「あんたが羽瑠さんの周りに居ると、迷惑なんだよー。必死に訴える彼の顔は、最早涙に溢れていた。

泣くなんて・・・卑怯だよ。

僕にはできない芸当だ。そうして其れが示すものが何なのかわかつた。

どうやら彼は、羽瑠の事が好きらしい。シンパの中で、どれだけの人が彼の様に羽瑠に本気なのか、解らない。でもけつして少なくはない筈だ。

そんな事をつらつらと思っていた僕に業を煮やしたのか、彼が僕の目の前に来る。そして小さな腕を振り上げた。

殴られる？！

まあ、それも悪くはないのかもしない。何故に彼がここまで怒っているのかは分からぬけれど、それで気が済むのならばとそう判断し、ぎゅっと田を開じた。

しかし、しばらく待つてもなんの衝撃もない為、そろそろと田を開けると田の前に壁があった。

良く見ると、其れは壁ではなく羽瑠の背部だった。

「秋葵」

静かな、しかし芯から冷え込むような、そんな声がする。須藤の体がビクリと揺れた。

その異様な雰囲気にもわりのシンパがどよめき、空氣を一笑するような笑い声があがつた。

「秋葵ちゃん、冗談だよね？羽瑠もまじになるなよー・・・」

シンパの声に羽瑠は秋を掴んでいた手を放す。そして、自転車を置き僕の腕を掴み歩き出した。驚きのあまり、声も出せない。そのまま強引に僕は歩かされていた。

強引に連れられ、到着したのは何棟かある講堂の一つだった。

そこは普段あまり使わない講堂。ほぼ全ての教室が資料室となつて

いる。

しかし、お金がある学校な為、必要ない所までベンチがあり、飲み物の自動販売機が設置されていた。

窓辺の日当たりが良いベンチに座らせられる。

迫力に負け、大人しく腰をおろした。

「何飲む？」

徐にそう聞かれ

「えっと・・・じゃあカフェオレで・・・」

戸惑いながら答えた僕の手に、カフェオレの缶が落ちてきた。

羽瑠は当然のように横に腰を降ろす。ドキドキしながらも、気付かれないように少し距離をとつた。

「・・・悪かったな」

突然そういうと、自分の持つていたコーヒーの缶を開ける。

「何が？」

本当に意味がわからなくて聞き返すと、羽瑠は苦笑を浮かべた。

「いや、秋葵がなんか可笑しな事言つて」

ようやくさつきの出来事のことを言つてはいるのだとわかった。

「ああ、さつきの・・・。全然気にしてないよ、絡まれる事なんて

しおつちゅうだし」

実際に街を歩いていると、見知らぬ人に声を掛けられたり腕を掴まれたりと絡まる事は多々あり、秋葵との出来事は些細な事だつたのだ。

妙な沈黙が流れる。

沈黙が続いた為見ると、眉間に皺を寄せ、複雑そうな顔をした羽瑠がいた。

「・・・お前・・・良く絡まるのか？」

低い声が聞いてくる。

僕は戸惑いながらも頷いた。

「なんでもっと早く言わないんだよ！」

急に声を荒げた羽瑠は僕の肩を掴んだ。

「なんでって……あなたには関係ないでしょう？！」

負けじと僕も声を荒げる。ぴたつと、羽瑠の動きが止まつた。

「関係……ない？」

傷ついたような顔をし僕を見詰める。

ああ、やつぱり僕は駄目なんだ……。

こんな顔をさせたかったわけじゃ、ない。

友人関係を築く事ができなかつた僕に久しぶりにできた友人だつたのに……。

これで、明日から又1人になると思うと涙が浮んだ。
しかし、その時だつた。

ふと、日差しが陰り……何かが僕を覆う。

そうして唇に何かが触れた。

目の前に羽瑠のドアップの顔がある。自分の唇に触れたのが羽瑠の其れだと気付いた時には、唇が離れていた。

呆然と、何もない壁を見詰める。

「……四季？」

遠慮がちな羽瑠の声が聞こえた。
ゆつくりと頭を動かし羽瑠を見る。

「……え、……何？」

当然のようにはめたけれど、頭の中はパニックだつた。
何が起きたのか理解できなくて戸惑う。

今、キスされた？？

なんで？？

からかわれた……のか？

いや、そんな筈はなく、僕の中でなかつた事にしてしまえば良いと思つた。

そうして羽瑠を見る。其處には、真剣な眼差しの彼がいた。

「四季、なかつた事にするなよ

心を読まれたかのような言葉。

戸惑いが顔に浮んだ。

「お前は何時もそつだよな」

彼の言葉に反発心が頭をもたげる。

「何時もつて・・・なに?」

ちよつときつてい言葉になつてしまつたけれど、抑えられなかつた。

「そつじやないのか?俺にはそつ見える」

迂回したような言い方。イラつとした。

「言つている意味が解らない。はつきり言つたらどう?」

ついつい、喧嘩腰になつてしまつ。そんな自分に嫌気を感じながら羽瑠を見た。

「何かあつても直ぐになかつた事にしてしまつ。秋葵の事だつてそうだ」

苦い顔で羽瑠は一気に言つた。

「秋葵が言つてた噂の事、四季は氣にならなかつたのか?俺は凄く気になつた」

「あつといえ、さつき須藤がそんな事言つていたよな・・・。
あの噂つていづのはな、俺と四季が付き合つていろいろつていう物なんだよ」

静かな羽瑠の言葉が浸透して来る。言葉が自然に零れた。

「なに、それ」

酷く驚いて、どのよつて出てきたのか解らない噂に振り回される。

「何、それ、だよな。でも俺は満更でもなかつたよ。噂でも良いから、其れをきっかけに四季と付き合えたら、と思つた」

耳を疑う、とんでもない告白を今受けている?

自嘲気味に笑う羽瑠を、凝視した。

「それつて・・・?」

何かを追つよつて言葉が出てくる。

「わからんない?・・・俺は四季の事が好きなんだよ
まるで、何かを確認するように羽瑠は言つた。

すき?

「あ、りがとう。・・・僕も羽瑠の事、友達として好きだよ

履き違えるなど自分に言い聞かせ、嬉しい誤解をしない様に、探る様に言葉を紡ぐ。

「そ、か・・・。だよな。普通、そうだよな。ごめん、なかつた事にして・・・」

悲しそうな顔をしそう告げると、羽瑠は立ち上がりその場を後にしてた。

その1（後書き）

稚拙な文でしたが、最後まで読んでくださりありがとうございました
^ 三 (—) 三 ^

なにぶん趣味で執筆していますので、ご容赦いただけたらと思います。
す。

次回も読んで下さると幸いです・・・。

生活が一変した。

やつぱり、いつもの様に大学までの道を歩く。

朝の喧騒を後ろに確認しながら、あの銀杏の古木の前に差し掛かつた時、僕の歩みが止まつた。そうして後方を確認するけれどあの声は聞こえない。

息が詰まるような言葉を残し、羽瑠は僕の前から消えた。

あれから、1週間。

毎日の行事のような朝の出来事が途絶えていた。

講堂のあちこちで、シンパの連中は目にするけれど、彼の姿は見つからない。

何がいけなかつたのか・・・。

意味が解らないキスと、悲しそうな顔を残し彼は消えた。實際には 消えた と言つのは語弊があり、この大学内にはいるのだろうけれど、僕の居る空間には入り込まなかつた。

やつぱり、こうなるのか、と溜息をつきつつ再び歩みを進める。

何時もの事じやないか、と自分に言い聞かせる。以前に戻つただけ・・・。

平穀な、静かな日々に戻つて良かつたじゃないか。

わかっているけれど、2年という期間はあまりにも長すぎた。もうすっかりと、羽瑠がいる毎日が当たり前になつていて・・・、ぽつかりと空いた穴にピュー・ピューと風が吹き荒れていた。そうして、孤独感が僕を襲う。彼のおかげで、色のついた世界を見せてもらつていたのに、今はモノクロだつた。

「姫野」

意識を現実へと誘う声がする。

声の主を探すと、須藤ともう1人。確か、木崎、といったか。羽瑠の親友の1人だつた。

「・・・はい？」

彼に話しかけられた事はなかつた為、不審に思いながら答える。

木崎はにこりと笑い

「悪いんだけど、これ、あいつに持つて行ってくれないか？」
そういうと、なにやら封筒を僕に差し出す。

「・・・あいつって？」

「羽瑠」

どきりとした。横にうつむいていた須藤も顔を上げる。

「雪都さん？」

須藤の戸惑う声がする。それは僕も同じで、木崎を凝視した。

「あいつ、今熱出して休んでるんだ」

そうだったのか、だから姿を見かけないのか・・・。
ふと、納得するけれど、そとこれとは別で。

「なんで、僕に・・・？木崎さんが持つていけば、」

「あいつが熱出したのってあんたのせいだろ？」

僕の言葉を遮りとんでもない事を言つ。

「は？」

言葉が続かない。

「あの日から、あいつ熱出したんだよ」

あの日、を妙に強調し木崎は言つ。あの日、とは、あの日、の事だ
ろうか・・・。

「兎に角、頼んだから」

木崎はそう言つと、僕に強引に封筒を渡し須藤の腕を掴んで歩き出
してしまつ。

「つっちょ、僕は家も知らない」

「其処に住所書いてあるから」

そう、言い放ち、木崎は建物の中へと消えた。
呆然と渡された封筒を見る。

確かに表に、ここからそつ遠くない住所が殴り書きの様に記してあ
る。

なかつた事、には出来ないのか。

どうせたいした物ではないと思ひ。

しかし、大学の名前が入った封筒なわけで・・・。

「ああ～～～～～つ、
・・・・・しかたないか
・・・・・」

僕はくるりと踵を返した。

そこは、いいから辺では珍しく縁が沢山ある一角だつた。

一軒の綺麗なマンシングが見える。

あ
わかな?
」

咳して近づく

住所を確認し、エントランスにある数字が記されている基盤に、羽瑠が住んでいるであろう部屋番号を押し待つた。

聞こえた。

掠れた声。

ぎゅっと胸が痛んだ。

ノイロジカル

僕は慌てて、スピーカーに答えた。

如意

聞こえた。

『四季？！』

なぜだか、その声が全てを語っている気がして笑み零れた。

羽瑠「凄い声だね
大丈夫?」

ぐすくすと笑いスピーカーに語掛になると

声とほぼ同時に重そうなガラスの扉が、音もなく開いた。

歩みを進め、羽瑠の部屋がある8階をエレベーターで向かう。

8階に付きエレベーターが開くと、その階のエントランスに羽瑠がいた。

咳をし、ガウンを纏つた彼は僕を見つけると點けるように近づく。

「どうしたんだ？！まだ、授業がある時間だよな？？」

掠れた声でまくしたてるように言つ彼に、僕は苦笑した。

「出てこなくても良いのに。兎に角、更に悪くなると困るから家に入ろう？」

僕の言葉に状況が掴めていない彼は、首をかしげながらそれでも僕を招き入れてくれた。

其処は、その階でも一番口当たりの良いであつて、角部屋だった。広々としたダイニングが僕を出迎える。

「1人？」

僕の問いかけに彼は苦笑する。

「もう、5年は1人で住んでるかな？親は海外」

そうだったのか、と思う。

そして、ここに来た理由を思い出した。

「ああ、そうだ」

これ、と封筒を差し出す。羽瑠は首を傾げながらそれを受け取ると中身を確認した。

「あ、のやろ～～～～～」

掠れた声でそう吐き出すと、中身をぐしゃりと握り潰した。

「ちよつ！・・・・・いの？」

驚いて問い合わせれば、羽瑠は困った顔をする。

「？」

「これ、雪都からだろ」

質問に頷けば、彼は頭を抱えしゃがみこんでしまった。

「あいつ、なんか、四季に言つてた？」

その質問に少し考え苦笑を浮かべる。

「ああ、・・・なんか、羽瑠が熱出したのは僕のせいだとかなんと

か・・・

それを聞いて羽瑠はぎょつとする。やつしてもう一度、あのやうへ・・・と呟いた。

「?なんだか良く分からぬけど、用は済んだから帰るよ」
そう告げ、玄関へ向かおつとする僕に、羽瑠は握り潰した紙を差し出した。

不思議に思いながらそれを受け取り中身を見る。
文面を見、絶句した。

『羽瑠へ

馬鹿じやねーの?

姫ちゃん、又一人だぜ?

お前の告白、ちゃんと、しつかり伝わってないんじやね?

わざとものにしちまえ。

こつちがいい迷惑だ。

じゃあな

雪都

』

“姫ちゃん”とは、もしかして僕の事??
確かめるように羽瑠を見る。

彼はフローリングに座り込んだまま、僕に頷いていた。
かあーっと顔が熱くなる。

告白つて・・・

うおほん!と羽瑠が咳払いをする。

そつして、突つ立つてゐる僕の手を、そつと掴んだ。

「まあ、そういう事だ」

その言葉と同時にぐいと引っ張られる。バランスを崩した僕はそのまま羽瑠の腕の中に収まってしまった。

「ちよ、羽瑠?..」

「四季、俺は、お前の事が、好きだ。・・・愛してる

身じろいだ僕を抑え込むよつときゅうと抱きしめ、囁くよつて告げた。

体の先まで熱くなるのがわかる。
僕は何か言おうとするけれど、つまく声に出来ず口をパクパクとさせることしかできない。

羽瑠の顔が近付き2度目のキスをされた。

そのままゆっくりとフローリングに押し倒される。

羽瑠の唇が僕の首筋を這い、その手が服の中に入ってくる。ぞくりと甘い疼きが背中に走った。

「ちよつ、は、るー」

悪戯な手がボトムの中まで入って来て、僕の物をやんわりと揉み始める、本格的に焦った。

「は、・・・や、だ！！」

これは本当にやばいと思い、渾身の力を足に込める。と、羽瑠は声にならない悲鳴をあげた。どうやら、僕の右膝が羽瑠の腹部に命中したようだ。

冗談ではない。勝手に告白して僕の返事を聞かないなんて、あり得ない。

そんな状況で抱かれてたまるか！、と思つた。

羽瑠の下から這い出、乱れた衣服を整える。

「し、しき？」

苦しそうに呻きながら羽瑠が起き上ると、僕はキッと彼を睨んだ。

「・・・あ、ごめん。なんか、暴走しちゃって・・・」

今にも泣きそうな顔をした羽瑠が其處いた。

「いや、だよな。ほんとにごめん。・・・帰つていいよ」

まるで自己完結してしまつたかのような言葉に、むかつとくる。如何やら短気であつたらしい僕は、羽瑠の胸倉を掴み、グイッと顔を近づけた。

「勝手に自己完結してんじやないよ」

驚く程の低音に、羽瑠が目を剥く。

「勝手に告白して、はい、終わりなわけ？」

ドスの効いた僕の声に言葉もない。ただ、じつと僕を見つめていた。

「僕の返事はあんた、いらないのかよ」

声のトーンを少し上げ問い合わせるように告げる。何かに弾かれた様に羽瑠は頭を振った。

にっこりと笑い、羽瑠の胸倉を掴んでいた手を離す。すかさず羽瑠は居住まいを正し、僕に向き合つた。

「そ、うだよな、返事・・・聞かせて、もらえるか？」

おずおず、といった感じで聞いて来る。

しかし、僕は真顔のまま、告げた。

「その前に」

羽瑠がごくりと息を飲み込むのがわる。

「ベッドに戻つて」

こくこくと頷き、直ぐ行動に移す羽瑠を見て、もう怒れないな、と思った。彼の後に続き寝室に入る。羽瑠が大人しくベッドに入るのを確認し、端に腰かけた。

そうして深呼吸をする。

「・・・僕も、羽瑠の事、好きだよ。友達じゃなくて・・・愛して
る」

そう告げ、大人しくしている羽瑠に口づけた。羽瑠の腕が僕を包む。その温かい感覚につつとつした。

「じゃ、じゃあ、続き・・・良い？」

いやらしい顔をし告げた羽瑠に、しかし僕は舌を出した。

「だめ」

「どうして！？」

起き上がった羽瑠は切羽詰まつた様に言つ。僕は再び彼をベッドに押し込み

「僕のせいで、なんて言われたくない」

雪都の言葉を拝借した。

羽瑠の顔が困ったように曇る。しかし、何かを思い付いたらしくて

「こりと笑い

「治つたら、良い?」

僕の手を握り嬉しそうに告げた。

体中が熱くなるのがわかつて、僕はそっぽを向く。羽瑠の手が僕の手を強く握る。

「なあ、だめ?」

その、甘つたるい声に、僕はそっぽを向きながら、小さく頷いた。

。

いつものよつに大学までの道を歩く。

朝の喧騒を背後に確認しながら歩く。

そうして、いつもの銀杏の古木の前に差し掛かると、背後から声がした。

「四季!」

聞きなれたバリトンの声。

声の主は跨つていた自転車を降り、僕の横に付いた。

「おはよっ、羽瑠」

僕が二コリと笑い告げると、羽瑠も嬉しそうに笑う。

そのまま、大学までの道を歩いた。

今、この大学では可笑しな噂が流れている。

各務 羽瑠 は、姫野 四季 の犬になつたらしい。という物。

どうやら、毎朝の光景を見た人間が流した噂らしい。

僕はくすりと笑い、犬と呼ばれている学校一の男を見た。

「ん? なに?」

僕の視線に気づいた羽瑠が聞いて来る。

「別に、なんでもないよ?」

どうやら、本人もこの噂を知っているようだが、気にする素振りもなく、逆に『言わせておけばいい』との事だ。

相変わらずシンパも沢山いるけれど、僕を大切してくれる。

おまけに続く・・・

今、僕はとっても幸せで、ちょっと怖いくらいだ。
その幸せを、手放さないようには頑張ろうと、思っている。

その2（後書き）

稚拙な文面で申し訳ありません> m (—) m <

なにぶん趣味で執筆していますのでご容赦ください。

本編はこれで終了ですが、おまけとして羽瑠の話があります。

そちらも読んで頂ければ幸いです・・・

ミ

「ん・・・」

腕の中で、甘い吐息を吐きながら身じろぐ姿に田が醒める。ゆつぐりと覚醒する意識の中、腕の中の愛しい姿を確認した。

今日は土曜日で、俺も愛しいこいつも講義はなく、昨晩から甘い一時を楽しんでいた。

今でも信じられない。こいつが、四季が俺の恋人になつてくれるなんて・・・。

2年間、それなりにモーションを掛けていたつもりだけれど、にぶちんの四季は一向に気づかなかつたらしい。

出会いたのは、初めてのゼ!!。

講堂の中、一人で座つていた四季を確認した時、息が止まるかと思つた。

色素の薄い肌と髪、田鼻立ちもすつきつとしていて、周囲にいる同級達も遠巻きに四季を見つめている。

1輪の花。まさにそんな感じで、凛とした佇まいなのに何処か可憐なその容姿に息を飲んだ。

そうして俺は四季の虜になつてしまつた。

彼が通学してくる時間を見計らい、声を掛ける。

四季は不審ながらも必ず挨拶を返してくれた。

そして観察をしていた時、ある事に気付いたのだ。四季が何時も1人でいる事を。

1輪の花、という例えはどうやら大袈裟ではなくて、その容姿故に

他人を遠ざけてしまつらしい。それから、この天然でとんちんかんな性格も災いしている。

明らかに四季狙いで話しかけている奴もそれなりにいたが、やつぱりにぶちんが災いしているらしく、相手の気持ちに気づいていない様子だった。

ある毎時だった。

四季を観察しだして3カ月がたつていたと思う。

相変わらず1人でいる四季に一学年上の先輩、もう名前など忘れてしまつたがその人が声を掛け、四季を連れ出している所を発見したのだ。あまりにも不審な姿に、後をついていったのだ。

人通りの少ない学園の裏通りに2人はいた。

先輩が何かを言つているが四季の反応が無い。尚更不審に思い近付いてみると、どうやら先輩は凄く、それは物凄く怒っていたのだ。

「お前、いい加減にしろよ？！」

そんな言葉に、自分が言われている訳でもないのに驚いてしまつ。

「なんとか言えよ！」

更に続けられた言葉に、四季は眉を顰めた。

「・・・あなたの言つている意味が解らないのですが」

眉は顰められたまま、憮然と告げた言葉に先輩は更に声を荒げる。

「俺と付き合つてくれつて言つてるだろ？！」

・・・それ、怒鳴つて言つ言葉？？

最初にそう思つてしまつた。先輩は俺の方に背中を向けていた為その表情は見えないけれど、きっと真つ赤になりながらの言葉だったのだと思つ。

しかし四季はやつぱり眉を顰めたまま、言い放つたのだ。

「ですから、僕は何処にも行きません。行きたい所があるのならお1人でどうぞ」

明らかに的外れな答え。後ろ姿にも関わらず、先輩が怒りに震えているのがわかつた。

その手が拳を握るのが解り、ああ、これはやばいな、と思つたのと
体が動いたのはほぼ同時で……。

「四季！」

俺の声に驚いた先輩は一目散にその場を後にしたのだった。
急に目の前に現れた俺と、消えた先輩に驚いた四季たけれど、
一つ呼吸をし

「・・・なに？ 各務くん」

当たり前の様に返事をしたのだった。

その時俺は決意したのだ。この天然で危なっかしい四季を1人にしてはいけない。何があつても守るのだ、と。

あれから早2年。

何の進展もないまま過ごしていただけれど、四季の態度があまりにも
何も無く、心配するのも迷惑だとあの日に言われた気がして、にぶ
ちんだと知つていたのに伝わらない告白をしてしまったのだ。
即、ダメだとわかる反応で俺は逃げてしまつた。1人で落ち込んで、
考え過ぎた結果熱を出し・・・もう駄目だと思つていたけれど、そ
の後の展開は本編に書いてあるとおりで・・・。

可憐な容姿とはかけ離れている性格の持ち主で、兎に角にぶちんな
四季。

そんな四季が今、俺の腕の中で無防備な姿を晒してくれている。
信頼と、愛情。

両方を感じ、俺は1人でやりとした。

「は、る？」

いつの間にか、うつすらと目を開けて俺を見つめる姿があった。

「ああ、ごめん、起こした？」

そう言い形の良いその唇にキスを落とす。四季は戸惑いながらもその口づけに応えた。

「・・・ん・・・・」

甘い吐息を吐く四季を目の当たりにして、もうたまらない。

静かに覆い被さると、軽く押し返された。

「そ、そうだ、羽瑠」

困ったような顔で反らしそうとする。そんな四季もたまらなくて誤魔化されてやる事にした。

「ん？ 何？」

そう尋ねると、顔を赤らめながら俺を見た。

「あの、ずっと聞こいつと思ってたんだけど・・・」

言いよどむ四季を辛抱強く待つ。

「・・・須藤くん、つて、羽瑠の、何？」

その質問に絶句する。すっと視線を反らす四季に苦笑を覚えた。

「何つて、どういう事？」

笑いを含んだ言葉に、眉間に皺を寄せながらも何かを思案しているような顔で俺を見る。

「あの日・・・彼が僕に向けた刃は明らかに敵意で、羽瑠の事、好きなんだなあ～っていうのはわかつたんだけど・・・」

ああ、そうとつたか、と苦笑が零れた。確かに秋葵の態度は誤解を招く要素がふんだんに鏤められていた気はする。しかし、それはまあ、なんだ・・・。

「秋葵は、幼馴染なんだよ。可愛い弟分みたいなもんで、四季が思つているような感情はあいつにはないよ」

まだじと～つとした視線を投げかける四季に笑顔を向けた。

「俺は、これっぽっちも秋葵にやましい感情は、ない・・・あいつはまあ、木崎・・・」

「え？ 何？？」

語尾の消え入りそうな言葉に四季はクエスチョンマークを浮かべる。人の恋路に興味はない、これは又別の物語つてことで、だから、笑顔を浮かべ誤魔化す事にした。

「そんな事より・・・」

さつき誤魔化された事、と耳打ちし、そつすると四季は首まで真つ赤になりつつむく。

そんな反応も可愛く、愛おしく、再び四季に覆いかぶさつた。
俺が大学でどんな噂をされているかは、勿論知っている。
犬？

結構じゃないか。

俺としては、まあ、番犬つてところかな？

自分の魅力に皆目思い至らない、愛しい恋人を守っていく、そんな
番犬。

そんな事を思いながら、綺麗な桃色に変化した恋人の肌を堪能した。

END

羽瑠の恋 (後書き)

羽瑠の恋を、いががでしたでしょうか?

やつぱり稚拙な文です。

すみません、()

羽瑠と四季の物語はこれで終了ですが、本編でちりつと恋を現した

秋葵ちゃんの話

が続きます。

そちらも是非読んで頂ければ幸いです・・・

ガタガタつと音がする。

何だ?と思つけれど、JJIJは東京、隣近所の事は触れないにこした
事はない。

しかし、やはり気になる為そつと耳を澄ました。

と、突然家の玄関前に何ががぶつかる音がし、飛び上がりてしまう。
息を潜めて外の様子を窺うと、くぐもった声がした。

「いってえー・・・」

ハスキーな声。妙に気になり、更に様子を伺つた。

「畜生!・・・、勤労学生なんだからしかたねえだろよ!」

ハスキーな声が、誰とも解らない文句を言つていた。

どうする、僕?!

そんな思いが頭を擡げた。

どうするもこゝするも・・・

ああーーー!

僕は昔からお節介なのだ。

子供の頃から、人のいざこざに首を突つ込み、良く幼馴染のお兄ち
やんに怒られていた。

でも、染み込んでしまつた性格はそうそう変えられる訳もなく今に
至る。

腹を決め、そつと扉を開こうとするけれど

「あ、あれ?」

ドアノブを捻り力いっぱい押しても開けられない。なんだ?と思
再度押すと

「ん?」

外の声がし、ガタンと扉が開いた。

勢いで体まで外に出てしまつ。バランスを崩してしまつた僕はその
まま転びそうになり

「あわわわわ～！」

しかし、衝撃の代わりに何か大きな物に抱きかかえられていた。

「大丈夫か？」

驚きの籠つたハスキーな声が頭上からする。慌てて体制を直し、声の主を見た。

すらりと伸びた手足、180はあるであろう長身に、小さな顔があり、切れ長の涼やかな目が僕を捉える。幼馴染には負けるが、かなりのイケメンだった。

「あ、ありがとうございます……つてちが～う……あんた人の部屋の前でうるさいんだよ……」

恥ずかしさと、苛立ちで大きな声になってしまつ。

切れ長な目がぱちくりとし・・・

「・・・俺家がなくなっちゃつてや」

何故だかにこりと笑い

「しばらく泊めて？」

これが、僕、須藤秋葵と木崎雪都の奇妙な同居生活の始まりだった。

ぴぴぴ、ぴぴぴ・・・っと電子音がする。

朝を知らせる僕の目覚ましだ。

まだ眠い眼をこすり、カーテンを開けると明るい日差しが襲う。

そうして、隣の部屋からも、やっぱり電子音が聞こえてくる。雪都のアラームだ。

なかなか止まらないアラームに溜息をつきつつ部屋を出る。そうして隣の部屋の扉をノックした。

「雪都さん、朝ですよ。雪都さん！」

いくら声を掛けても返事はない。これも何時もの事で、又溜息が出た。

奇妙な同居生活が始まり早くも一年が経とつしている。

同居人の雪都は一向に新しい物件を探す事なく、居座り続けていた。

季節は冬。

寒い朝だった。

低血圧らしく、朝はめっぽう弱い雪都を起すのも僕の日課になつていてる。

・・・まあ、同じ大学に通つてゐる、1つ年上の彼を無碍にもできず、頼まれてもいないので起してしまつのは、昔からのお節介な性格が災いしてゐるのだが・・・。

なかなか起きてこない雪都に業を煮やし、扉を勢い良く開けると彼はまだ真夜中だった。

気持ち良さそうな寝息を立て、布団を抱きしめるように眠つてゐる。起きる気配はなく、仕方なく近づき肩を叩いた。その時だつた。

によつと伸びた腕が、僕の腕を掴みそのまま・・・

「わあ！」

ぐいっと引つ張られ、ストンと雪都の腕の中に。

え？・・・ちよ、なに？？

何が起きたのか理解できずにそのまま、固まる。

ぎゅっと抱きしめられ困惑した。

体がかーと熱くなるのが解る。真近に雪都の整つた顔があつた。あ、睫毛が長い・・・そんな事を思いながら、体を揺らうとしたが雪都の顔が更に近づき・・・

「つん？！」

自分の口に何かが触れたと思つと、口腔内を犯される。

そのまま、視界がぐらつと揺れ、いつの間にか雪都の下に自分がいた。

何が起つたのか理解できず、犯されている口腔内がじつと快楽を運び抵抗も出来なくなつた頃、よつやく口腔を解放され・・・

「おはよ、秋葵ちゃん」

ねつとりと耳をくすぐるバスキーボイスが聞こえた。

その瞬間僕の右手が上がり、パン！ と乾いた音が響いた。

「・・・てえ・・・・・」

雪都の呻き声を聞きながら、どうにかその腕の中から這い出る。ふざけるな！ と、まだドキドキしている鼓動を誤魔化しながら乱れた衣服を整え、ギッと雪都を睨み見た。

「朝から、彼女と間違えないで下さい。・・・いい迷惑です」

表情を消し、静かにそう告げると逃げるよひに雪都の部屋を後についた。

ハスキーボイスが、秋葵ちゃんと背後から聞こえる。

それを振り切るように、家を後にした。

人より小さい僕だけれど、歩幅を大きく取り歩く。

子供の頃から幼い顔立ちのせいか、妙に可愛がられるけれどあまりいい気はしなかつた。

そんな僕を人並みに扱ってくれたのが、近所に住んでいた一つ年上のお兄ちゃん、各務羽瑠だった。

羽瑠の事が大好きで、彼のそばにいたくてこの大学に進んだ僕は、毎日彼の姿を探す。

構内に入り、直ぐに彼を見つけた。沢山のシンパが彼の、・・・いや、彼らの周りを囲む。

羽瑠の横には不機嫌そうな顔をした、妙に綺麗な顔立ちの男がいたのだ。

彼の名前は、姫野四季。

どうやら羽瑠のお気に入りらしい。

いつも僕がいた羽瑠の横は、今彼の物になつていていい気はしない。だから僕は彼が嫌いだった。

つかつかと、人の塊に近づきシンパどもを押しのけるよひに羽瑠に近づく。

「羽瑠さん！ ！」

声を大にして呼びかけた。

シンパともも僕には道を譲つてくれる。そして四季とは反対側の羽瑠の横に着いた。

「おはよ、秋葵」

羽瑠の低い声が耳に心地良い。

「あれ？・・・雪都は？」

今一番聞きたくないはずの名前にじきりとした。

そうしてさつきの口付けを詳細まで思い出してしまう。

僕は赤くなってしまった顔を隠すように下を向いた。その頭に大きな手が乗っかる。

「どうした？ 何時も一緒なのに」

そんな些細な事でも特別な気がして僕は急いで顔を上げた。

「何時も一緒なんて、そんな事ないよ！ たまたま・・・」

その時だった。

次の言葉を紡いだとした僕の声に被さる様にハスキーボイスが木靈する。

「秋葵ちゃん！ 僕を置いていくなんて薄情だよ～」

間延びした雪都の声だった。

「雪都、おはよ」

羽瑠の声に雪都は笑顔を向ける。何故だかその行為にずきりと胸が痛んだ。

なんだ？ これ？

自問自答しつつ雪都を睨む。

「薄情だあ～？ 失礼な！！」

僕はそう捨て台詞を吐きながら、人だかりから離れた。

バイトを終え、帰路に着く。

本屋のバイトは案外に肉体労働でかなり疲れているけれど、夕食を作らなきゃいけなくて、自宅の近くにあるスーパーに立ち寄った。

雪都は今までどうやって一人暮らしをしてきたのかわからない位家事全般が出来ない。

まあ、もてる雪都の事だから、女にやらせていたに違いないのだが・・・。

だから同居生活を始めてから、家事は必然的に僕の仕事になつていった。

今日は朝からある意味凄く疲れてしまつたから、簡単な物にする。食材を籠の中にほうり投げながらレジに向かつた。

食材の入つたエコバッグは妙に重い。

ずつしりと肩に荷物が食い込んだ。

疲れた体を引きずりながら、なんとか部屋の前まで辿り着く。そして家の鍵を開けた。

シーンと静かな部屋。

何時もならもう帰つていてリビングのソファーにだれているはずの雪都の姿が見当たらない。

あれ? つと思い、彼の部屋をノックしたが返答はなかつた。

なんだ、出かけてるのか・・・

妙な脱力感に、はつとなりながら、

「さて、作るか」

なんて独り言で誤魔化し作業に取り掛かつた。

食材をエコバッグから出し、リビングの机に並べる。そして、順番に食材を刻んだ。

今日は冷ご飯が結構あるから五目チャーハンにする。

手際良く食材を炒め、仕上げに水溶き片栗粉を投入するとあつと言う間にとろみが付き始めに炒めておいたチャーハンに掛けた。香ばしい香りが僕の鼻空を擗る。

ぐーっとお腹が悲鳴を上げた。

今すぐにでも食べててしまいたい欲求をぐつと堪えて、出来上がつた2人分の夕食にラップをする。

そうして玄関を盗み見た。

しかし、雪都が帰つてくる気配はない。

しかたなくリビングのソファーに腰掛け、読みかけの単行本を手に取つた。直ぐに本の世界にのめり込み文字を追つていく。

あつという間に読み終わつてしまつた。そうして時計を確認し、驚いた。

もう日付が変わつている。

雪都は？と思ひ玄関を仰ぎ見るけれど、帰つて來た形跡はない。一応、と思ひ彼の部屋をノックし、やはり帰つていない事を認識する。

携帯を開いて見ても、彼からの着信はなかつた。

何故だかとつても悲しくなつて涙が浮んだけれど、零れる前に拭う。そうして冷めてしまつた五目チャーハンを無言で平らげた。美味しいはずのチャーハンが、しかし何の味もしなかつた。

朝になり、何時もの時間に目が醒める。

隣の部屋からはけたたましいアラームの音がしていた。

帰つて來たんだ・・・

そう思つけれど、リビングに出、昨晩作つたチャーハンがそのまま机に置かれているのを発見した時、誤魔化したはずの涙が零れた。ぽろぽろと頬を伝う涙に自分の気持ちを認識する。

ただの同居人ならば、わざわざ食事など作らなくいい。アラームが聞こえたからといって起こす必要もない。寝ぼけてキスされてもうろたえる事もない。

つまりこれは 恋 なのだ。

自覚してしまえばもうどうしようもない。

ただ、雪都に逢いたくなくて、急いで家を出た。

いつもより随分と早い登校になつてしまつたけれど、しかたがない。ほとんど人気の無い構内を歩き、やっぱり人気の無い中庭に辿り着いた。

何時もは無駄に噴水が湧き出でおり、学生で賑わっているはずの中庭。

ぐるりと周りを垣根の様に囲う木は桜だ。

春になれば薄い桃色の花が咲き乱れ、学生が集つ。

僕はその中でも一際見事な姿を見せる桜の木の下に腰を降ろした。
2月の風は肌を刺す様な寒さで、しかし、煮えきった僕の頭にはちよつじ良い。

溜息を吐きながら、仕方なく読みかけの単行本を広げた。

STORY TWO

家に帰りたくない。

なんとか今日一日を、彼に会わずに過ごしたけれど、今僕たちは同居しております。家には彼が居るのだ。

逢いたくない。

自分の惨めな想いに左右されるのは悔しかつた。家には向かわずに歩く。同級の人間に泊めて欲しいと頼んでみたけれどことじとく断られた。

みんな薄情だ！！

そんな自分勝手な事を思いながら、仕方なく羽瑠の家に向かう。こんな事で、幼馴染の彼を煩わせたくないけれど、背に腹は換えられない。

深呼吸し、羽瑠のマンションのインター ホンを押した。オートロック形式な為、ロビーでインター ホンの返事を待つと、機械音と共にバリトンの声が聞こえた。

『はい』

短い返答に安堵の溜息が出る。

「羽瑠さん？ 秋葵だけど・・・」

僕の言葉に、羽瑠は驚きながらもオートロックの鍵を開けてくれた。エレベーターで、彼の部屋まで向かう。部屋のインター ホンを押すと直ぐに扉が開かれた。

「秋葵、どうした？ 珍しいな」

笑顔で出迎えてくれた幼馴染に、涙腺が緩む。ぽろりと零れた涙に、羽瑠が驚愕するのが伝わってきた。しかし1回緩んでしまった涙腺をそう簡単に引き締める事は出来ずに、僕は羽瑠の大きな胸に泣き崩れた。

どの位そうしていたか、ふと気付くと、僕達は玄関の中にいて羽瑠の大きな手が、僕をあやすように背中を摩ってくれる。

大きく深呼吸し羽瑠の腕の中から出た。

「落ち着いたか？」

全てを包み込むような優しい顔をして羽瑠が問いかける。

僕は頷き答えた。

「・・・ごめんね、羽瑠兄」

学校では使わない呼び名。羽瑠は、気にするなど言い僕を家の中に招き入れた。

ソファーに座つた僕に温かいミルクを渡してくれる。羽瑠も向かいのソファーに腰を降ろした。

「で？・・・どうした、何があった？」

静かにそう問われ、固まる。何をどう話したら良いか解らずに僕は下を向いた。

「・・・雪都となんかあつた？」

的を得た言葉にぱっと顔を上げる。想いの丈をぶつけてしまいたい衝動に駆られるけれど、まさか男の雪都に恋をしていました、なんて言える訳もなくて、途方にくれる。

「・・・別に、ただ家に・・・そう!「キブリが出たから、帰りたくないんだよ」

我ながら、なんてちんけな嘘を、と思いながらも、悟つてくれるなと羽瑠を見た。そこには険しい顔の羽瑠がいる。

「・・・言いたくないら構わんが」

溜息と共に羽瑠はそう告げ、徐に携帯を取り出した。

「悪い、ちょっと良いか?」

携帯を軽く僕に見せながら席を立つ。僕はこくこくと頷き、ホットミルクに口をつけた。

我ながら恥ずかしい所を見せてしまつたと後悔したけれど、羽瑠は特に何も言わず、勿論帰れとも言われていない為、今日は何がなんでもここにいるぞと決めた僕。物思いに耽つていると、羽瑠が帰ってきた。妙にここにこことしているなあ、と思つたけれど突つ込まずにおく。

「今日これから四季が来るけど、構わないよな？」

徐にそう聞かれ、訝しげに首を傾げるも、駄目とは言えない。曖昧に頷き対応した。

「ゼミの課題があるんだ。悪いな」

その後は他愛も無い昔話をし、僕は徐々に寛ぎ始めていた。そんな時だった。羽瑠の部屋の中に呼び鈴が響く。

「お、早いな」

そう言い羽瑠はインター ホンを上げる事無く鍵を開けた。

「確認しなくていいの？」

僕の疑問に、いいの、と短く告げ玄関に向かう。腕時計を確認しふと顔を上げた時、今度は違うチャイムの音が響いた。

「来た来た」

妙に嬉しそうな羽瑠。じらすように玄関を開けないと、今度はけたたましい音で玄関を叩く音がした。あの四季がこんな事をするかな、と疑問に思い玄関を覗き見る。

「はいはい」

くつくつと笑いながら羽瑠が玄関を開けた瞬間、大柄な男が飛び込んで来た。

「羽瑠、てめえ～・・・」

ドスの効いたハスキーボイス。今にも羽瑠に殴りかかりそうな勢いの彼が、視線をずらしあつけにとられている僕を見つけた。

「秋葵！？」

ほつとしているような、怒つているような聲音でそう呼ばれ、ビクリとする。初めて呼び捨てにされた。そんなどうでも良いような事を思いながらソファーから立ち上がりつた僕に雪都は駆け寄るように向かって来た。そのままの勢いで僕の両肩を掴む。

「無事か？！何もされてないか？！」

意味の解らない質問に首を傾げる。

「な、に言つての？雪都さん」

僕の言葉に、ほつと息を吐き僕の肩を抱くようにすると羽瑠に向けて

「連れて帰るぞ」

そつ告げ、僕には有無も言わせずそのまま羽瑠の家を後にした。玄関を出る瞬間羽瑠の顔を仰ぐと、くつくつとまだ笑つており、その手を軽く上げ、僕達を送り出した。

今日は絶対に帰るまい、と思つていた我が家のソファーに僕は座つている。

横には怖い顔をした雪都が座つていた。

何故だか居心地の悪い思いをしつつ雪都を見る。そんな僕の視線に気付いた彼は僕の方を向いた。絡み合つ視線に顔が熱くなるのが解り、いたまれなくなつた僕は急いで立ち上がつた。

「そ、そうだ、雪都さん、お腹空きませんか？夕食まだですかね、僕作ります」

早口にそつ告げ歩きだそつとした僕の手首を何かが掴んだ。其れが雪都の手だと解ると、そこがまるで心臓のように波打つ。

「秋葵ちゃん、なんで今日俺の事起こしてくれなかつたの？」

静かなハスキーボイスが、しかしまるで詰問しているかのように響いた。

何をどう答えれば良いのか解らずに、振り向く事も出来ずにその場に固まる。しばしの沈黙の後、僕の体が凄い勢いで引っ張られ、そのまま雪都の腕の中に包まれた。

「大学で秋葵ちゃん探しても見つかなくて、羽瑠から電話があつて心臓止まるかと思つた」

苦しそうな雪都の声。羽瑠が電話したのは雪都だったのか、とぼんやり思つ。

「羽瑠が秋葵ちゃん食つちまつで、なんて恐ろしい事言つから居ても経つても居られなくて・・・」

「え？」

聞こえてきた言葉に驚き、顔を上げると、こつもおぢやらけている

雪都の顔が真顔にと変わっていた。

「秋葵ちゃん……俺、お前の事好きなんだ。誰にも触らせたくない」

「んでもない言葉に視界が歪む。

「秋葵ちゃん、聞いてる?」

返事も出来ないでいる僕に、心配そうな顔をし雪都が声を掛けた。

「え、あ?・・・僕の事、が好き?・・・嘘ばっかり!!--」

信じられなくて声が上ずる。

「嘘じゃないよ」

優しい雪都の声。しかし、彼が女性にすぐもてる事を知っている。彼女も居たのを知っている僕にはやつぱり信じられなかつた。ぐつと腕に力を込め、抱き締めて来る雪都から体を遠ざける。

「・・・からかわないで下さい。雪都さん彼女とか沢山いるじゃないですか!」

僕の放つた言葉に雪都の整つた顔が歪む。突つぱねていた僕の腕を掴むと自分の方に引っ張り、僕の唇を奪つた。口腔内をまさぐるよう舌が這い、呼吸が上がる。振り払おうとするけれど、強い力で抑えられできなかつた。

いい加減息が出来なくなつたころ、唇が離され新鮮な空気を肺一杯に吸い込んだ。

肩で呼吸する僕に雪都は熱い視線を送る。僕の呼吸がようやく落ち着いた頃彼が口を開いた。

「からかつてなんか、いない。確かに女には不自由してこなかつたけど、お前と同居を始めてから全部切つた」

ハスキーボイスが、何故だか少し震えている気がして、拒絶の言葉を飲み込む。

「・・・あの日が始めてじゃなかつたんだよ。秋葵と逢つのは、俯き加減で雪都は言う。

「今何か、とんでもない事を言つた・・・?」

今雪都は、僕に以前逢つたと言つただろうか? 頃見当がつかない。

雪都に出会ったのは確かあの日が初めてだつたはずで……。

「俺と羽瑠は小学校も、中学校も一緒になんだよ」

苦笑気味で雪都は言い、そつと僕の手を握る。びくりと体が反応するけれど、不思議と振り払うことはしなかった。

「まあ、高校に入学する年に、俺の家は崩壊して母親と一緒に母親の実家に越したけどな」

そんな告白。

「え、じゃあもしかして一緒に遊んだ……？」

僕の問いかけに雪都は頷く事で肯定した。

遠い記憶を呼び覚ます。羽瑠と何時も一緒に居た、もう一人のお兄ちゃん。背が小さく、しかし切れ長の涼やかな田元をした、やつぱりちょっとハスキーな声のお兄ちゃんが、居た気がする。

「たしか……“ゆき”って呼ばれてた……？」

確認するように雪都を見ると、やつと思い出したかと叫ぶ様に頷き、握っていた僕の手の甲にその脣を落とした。

そんな行為にどきりとする。口付けたまま僕を上田遣いに見詰め、そうして、もう僕はダメだつた。昨晩理解した、雪都を好き、と言う気持ちが堰を切つたように溢れ出してきて、涙に変わり飛び出してくる。

ぽろぽろと零れ出した涙を、雪都の長い指が掬い取つていいく。

そんな動作を確認しながら、じゃあなんで昨晩僕の作った夕食に手を付けなかつたのか、そんな疑問が浮んで来た。留める事が出来ず、に言葉がするりと飛び出してくる。

「……じゃあなんで、僕の作ったご飯、食べててくれなかつたんですか？ 昨日はなんで遅く帰つてきたんですか？」

涙でちゃんと発音できたかは疑問だつたが、言いたい事は言つた。そんな僕を雪都の大きな体が抱き締める。腕の中にすっぽりと埋まりながらその安心感に、もう、どうでもいいやと思った。どんな理由でも、もういい。今、この瞬間が全てを物語つていいように思つた。

頭上で、ハスキーボイスがクスリと笑う。

「はいはい、泣かない」

ぽんぽんと背中を摩られ、うつとりと目を閉じた。

「・・・昨日の朝、気持ちを抑えられなくてついついお前にキスしちゃつただろ？」

苦笑まじりにそう聞かれ、頷く。

「あの後、お前大学でも俺のこと避けるし、そんなに嫌だったのか、と思つたら素面ではいられなくて羽瑠の家で自棄酒してたんだよ」羽瑠の家・・・と言つ事は、羽瑠は雪都の気持ちを知つていたつて事なのだろうか？

疑問符が頭を過ぎる。確かに、羽瑠が雪都に電話をかけた時、『食つちまう』とかなんとか…。

因みに、もしかして僕の気持ちも気付いていた・・・とか？

ぞつとしない事を考えながら、雪都の顔を見た。

「で、べろんべろんになつて帰つて来たんだよ。めしには気付かなかつたんだ。悲しい思いさせてごめん。でもちゃんと朝食べたから」素直に謝られて、しかも朝ちゃんと食べていてくれたんだと思うと、心がふわりと温かくなる。だから、僕も素直にこくんと頷いた。そんな僕に再度キスが降りてくる。気恥ずかしさに少し俯くけれど、素直に受け入れた。

「愛してる、秋葵・・・」

優しいキスの合間にハスキーボイスが囁く。

僕は其れを受け入れ小さな声で想いを打ち明けた

。

けたたましいアラームの音が、直ぐ近くで聞こえる。

まどろみの中からゆっくりと覚醒し、アラームの元を手探りで手繩り寄せた。

それが何時もと違つ手触りで、いっさに覚醒する。

目を開けると直ぐ横に、切れ長の目元が特徴的な整った顔があつた。驚いて体を動かすと、鈍い痛みが体中に走る。其れが何を意味するのか直ぐに悟り、一人で赤面し、再度布団をかぶつた。

その振動で、何時もはとつても田覚めが悪い雪都が目を開ける。ところとした田を僕に向け、その顔を笑顔で崩した。

「おはよ、秋葵ちゃん」

ハスキーボイスが甘つたるく囁く。

少し掠れたその声が昨晩の情事を思い出させ、僕は一人で熱くなつた。

「お、はよう」ぞこます」

妙なところでかんでしまつたけれど一応挨拶を済ませると、いたたまれなくなり布団を出よつとした僕を、雪都が止める。

強い力で雪都の腕の中に収まつてしまつと、居心地の良かうつとりしてしまつ。

「今日は大学はお休みしよ」

そんな甘い誘いに、ぐらりと傾きそうになるけれど、そつは言つていられないのが現実で。

「駄目ですよ、雪都さん。単位まずいんでしょ？」

さばり癖のある雪都。朝しつかり起こし、一緒に登校しても途中で消える事が多かつた雪都は結構単位がやばいらしい。

「ん？・・・大丈夫、まだ平氣だから」

そんな事を言いながら、雪都の手が妖しく蠢くのが解つた。手の動きがしつかりとした意思を持つてゐるのがわかり僕はあわてる。

「ちよ、どこ触つてるんですかっ」

蠢く手を掴み抗議の声を上げるけれど、雪都は意に返さないようで、手は止まってくれない。下生えを擦られ僕の物が形を変え始めると、雪都は楽しそうに笑つた。

「だ、めです！」

最後の気力を振り絞り、止めにかかつた僕を、しかし雪都はやつぱ

り余裕の笑顔を向け、

「ちょっとだけだから・・・」

そんな甘い囁きをし、抗えなくなってしまった僕の唇にキスを落と

した。

おまけに続く・・・

STORY TWO (後書き)

いかがでしたでしょうか？

雪都と秋葵のラブ・ラブ恋物語でした。

羽瑠と四季の場合にもあった様に、最後は雪都田線の物語を収録しようかと思います

す。

最後まで、楽しんで頂けたらと思います。

初めてあの子を見た時、なんてかわいらしげ子なんだらうと、頬が緩んだ。

小さな手足を一生懸命に動かし、先を行く俺と羽瑠に追いつくと頑張っている姿・・・。

『羽瑠兄、ゆき兄！』

と呼ばれ苦笑しながら追いつくのを待っていたのを覚えている。家の都合で引越し、なんとなく入った大学で羽瑠と再会、そしてあのアパートで秋葵を見つけた時、俺は恋に落ちた。けして美人ではないけれど愛くるしい顔は、幼少の頃のまま。まつすぐな視線を向けられ、今までのどんな女にも感じなかつた感情が公になつた。

ああ、俺は幼い頃からこの子に夢中だつたのだと思った。だからあの日、強引に同居を申し出たのだ。当然断られると思っていたのに秋葵は

『・・・しようがないな、良いですよ』

と了承した。

朝がめつぽう弱い俺を、根気強く起こしに来る秋葵に、もつたまらない。

我慢も限界に達し、あの日ひとつといつ寝ぼけてるのをじつにキスしてしまつたのだ。

しかし、逃げ出されて後悔した。

自分がいい加減である事をいいように使い、秋葵に甘えていたのが災いしたのか・・・。

秋葵の側で、まつたりと出来れば良いと思っていたのに、それだけでは我慢が出来なくて、あの無垢な素肌を物にしようとしたのがいけなかつたのか。

いやいや、気持ちを告げなかつたのがいけなかつたのだ。

でも、だつて秋葵は俺の親友で悪友の羽瑠の事が好きなのだ。

側にいればわかる事で。

そんな羽瑠の前に姫野、と言つ男が現れた事で俺のバランスが崩れた。

秋葵の羽瑠への独占欲をいたるといひで田の当たりにしてしまい、ホントにもう限界だつた。

早まつた行動に出でしまつたのは羽瑠と姫野のせい…！

そんな自己中な考えの中、羽瑠にさざん管を巻くと、

「早く告白すればいいだろうに・・・」

と呆れられた。

わかりきつていた言葉。

小さなプライド（そんな大層な物ではないけれど）が崩れて行く音がした。

だけど、だけれど俺なりに秋葵を大事にしてきて、そんな相手にあんな無体な事をしでかして傷つけて、今更どんな顔をすればいいのかわからなくて・・・。

逃げ出した秋葵を捕まえる事が出来なかつた。

泥酔状態で秋葵がいるであろう家に帰り、リビングを見る事もなく自室に入つたのは夜中の3時を過ぎていたと思つ。

まさかあんな事をしでかした俺に夕食が準備されているはずはないと思い込んでいたのだ。

何時ものようにアラームが鳴るけれど、やつぱり秋季は俺を起こしには来てくれなくて、寝付けなかつた俺は、玄関が静かに閉まるのを聞いた。

そろりとベッドから降り、溜息と共にリビングに出ると机の上に五目チャーハンがあつた。

どう見ても、多分俺の為の食事。

嬉しさと罪悪感に、不思議な感覚を味わいながら五目チャーハンを口にした。

翌日、バイトが終わり、そろそろ帰つて来る頃になつても秋葵が姿を見せなくてやきもきしていた俺の携帯が着信を告げる。

液晶を確認し羽瑠だとわかると、イライラしながら通話を押した。そんな俺の苛立ちを知つてか知らずか、羽瑠は開口一番にこんなことを言つたのだ。

『お前なにしてんの？』

いらっしゃし、返答する声が荒くなる。

「あ？！何が」

しかし、羽瑠は携帯の向こう側で、くすくすと笑う。余計に苛立ちを募らせた俺が終了を告げ、通話を切ろうとした時、とんでも無い事を言つたのだ。

『秋葵ならここにいるよ。あんまり可愛いから、食つちまおうと思うんだけど』

くつくつと笑いを含んだ声に、何かがぶち切れる音を聞いた。携帯を投げ捨て家を飛び出し、羽瑠のマンションにたどり着く。オートロックの煩わしさに苛立ちを更に募らせ、エレベーターに乗つた。

部屋のチャイムを鳴らしても返答が無い事にあせりを感じ、手荒くノックをし扉が開いた時の羽瑠の笑顔は今でも忘れられない。秋葵の無事を確認した時の俺の安堵は誰にもわからないだろう。

『雪都さん、痛い』

思つた以上に力が入つていていたのだろう。秋葵の抗議の声ではつと我に返つた。

中庭の大きな桜が見ごろを迎えている。

『大丈夫ですか？怖い顔してますよ』

思い出してしまつた過去にこわばつてしまつたのだろう顔を笑顔にする。

『ごめん、なんでもないよ』

俺の優しい声に秋葵は安堵する様に笑つた。

まあ、羽瑠にはほんとにむかついたけど、今こいつして秋葵を自分の物に出来、幸せな一時を満喫できているのだから、よしとするしかない。

仕返しは、後日たっぷりとする事にして、今は腕の中にいる秋葵をたっぷりと味わう事に決めた俺は、その小さな唇に自分の其れを宛がつた。

END

春のめぐみの中で 雨都の夜（後雨）

古木の下で・・・

これで完結です。

読んで下さった方、如何でしたでしょうか？

少しでも満足して頂けたら光栄です。

次の作品も覗いて頂けたら幸いです・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0134/>

古木の下で

2010年10月10日01時35分発行